「近現代アジアのグローカル文化──アイデンティティ・文学・歴史」

第9回東アジアと同時代日本語文学フォーラム（10月16日・17日開催）

**在日台湾人作家、東山彰良****『小さな場所』研究**

**――アイデンティティとユートピアの虚実**

**謝惠貞**

**文藻外語大学**

**要旨**

在日台湾人作家の東山彰良（王震緒）は、直木賞受賞作『流』、及び読売文学賞、織田作之助賞、渡辺淳一文学賞の三冠受賞作『僕が殺した人と僕を殺した人』 に続いて、同じく台湾を舞台とした三作目となる『小さな場所』（文藝春秋、2019.11。）を発表した。本作では、9歳の少年であるを主人公に、台北・西門町の紋身街を舞台に繰り広げられる都会的な奇譚を描いている。中国語翻訳版が同時に発売されたことから、東山彰良が台湾と日本の読者を意識して文章構成を考えていることがわかる。また、西門町は東山の出身地の換喩（metonymy）機能を持っている。

**第一節「風景・・周辺人―奇譚」**では、西門町は「すでに消去されているが、日本の植民地時代の現代性、国家発展主義の論理、ローカル／グローバルなつながりを持つ若者たちのサブカルチャー遺産が積み重なったパリンプセスト」[[1]](#footnote-1)と見なす。

また、紋身街で繰り広げられる刺青への論述とその象徴が、西門町の風景が持つ多重の寓意と文化的な蓄積をいかに支え、強化しているかに注目しなければならない。本発表では、「アイデンティティとしての刺青」など肯定的な意味と、「自己否定、逃避の修辞学」など否定的な意味に分けて分析する。

これまで、スティグマ（stigma）[[2]](#footnote-2)がしばしば否定的とみなされる烙印、つまりアイデンティティと捉えられてきたように、刺青もスティグマとされてきた。東山本人の移民としてのアイデンティティの揺らぎは、外部からの評価で付けられたスティグマとは必ずしも一致しない。しかし、長年アイデンティティに悩んでいた東山彰良は、『越境』で理想を吐露し、「自分が生まれ育った土地を誇りに思うが、狭いナショナリズムに陥ることはない」[[3]](#footnote-3)ことこそが新しい時代の価値観であると結論づけている。そこで、上述の議論が、登場人物のアイデンティティにどのような影響を与えるのかを考察したい。

**第二節「東山彰良のふりがな（ルビ）使用戦略」では、**さらに、絵画技法の「透視法（Perspective）」、つまり「遠近法」[[4]](#footnote-4)の概念から、「ふりがな」や注釈が読解言語において、どのように「パリンプセスト」の効果を生み出すことができるかを、本作における「文化翻訳」を分析して論じる。

また、発表者は、同一作家の台湾を舞台にした2作品のテクストの文化翻訳を比較することは、両作品のテーマの違いをある程度示唆するものでもあると考えている。したがって、ふりがなと注釈による文化翻訳により、＜表一＞「『小さな場所』の日本語原著における文化翻訳」と＜表二＞「『流』の日本語原著における文化翻訳」[[5]](#footnote-5)を比較する。

さらに、刺青（紋面）は原住民の神聖な伝統であるため、東山は原住民を描写する際に、刺青を芸術的な議論に昇華させており、これは本作品のサブテーマであると言えよう。彼は『越境』の中で、「自らの生存場所を勝ち取るための闘争、それが芸術だ」[[6]](#footnote-6)と説明している。この点についてもテクストに即して論じる。

**第三節「教養小説（成長小説）におけるユートピアとディストピア」では、**教養小説（成長小説）としての側面に注目し、刺青をめぐる意味の弁証は、小武の成長や価値観の形成にどういった影響を与えているかを解き明かす。『小さな場所』では、猥雑な紋身街であっても、小武の彫り師への「甘え」は、麺屋の家族以外の「疑似家族」を作り出しており、その感情が、紋身街をユートピアとして理想化していることがわかる。

この作品では、紋身街に対するこのような感情は、最終的に主人公の小武と同級生によって描かれた架空の宝箱「楽園の壺」に姿を変え、残しておきたい素晴らしい事物を封印するタイムカプセルを彷彿させる。しかし、紋身街を楽園の壺に入れるに値するかについては、紋身街がユートピアなのかディストピアなのかということが換喩的に論述されている。一方、社会の権力構造に敗北した周縁人にとって、西門町の紋身街は、ディストピアの世界として存在するのに十分であり、ユートピアへの風刺でもある。

注目すべきは、価値観形成期にある小武が、空気（大人の世界の道徳的ルールや権力構造）を読むことを学ぶことによって、徐々に自身の価値観の柱を徐々に形成していることである。彼が直面したユートピアとディストピアの弁証は、彼の成長の儀式である。この弁証は、安定した思想体系、アイデンティティ（価値観の柱）を再構築するための二重の検証だともいえる。

最後に、東山が叙述した価値観の衝突と交渉が、いかに読者の内省を促す原動力となり、自己アイデンティティの形成過程やグローカルな多文化共生の寓意（allegory）を問い直しているのかを考察する。

1. 李明璁「去／再領域化的西門町：「擬東京」消費地景的想像與建構」『文化研究』 9期、2009.6、120頁。 [↑](#footnote-ref-1)
2. アーヴィング・ゴッフマン （Erving Goffman） 著、石黒毅訳『スティグマの社会学―烙印を押されたアイデンティティ』、せりか書房、2001.4、16-18頁。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 東山彰良「新時代」『越境』集英社、2010.7。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 遠近法とは、遠近感を表現するための絵画技法である。 近くのもの（前景）はやや大きく、遠くのもの（背景）はやや小さく描かれる。武蔵野美術大学 造形ファイルhttp://zokeifile.musabi.ac.jp/%e9%81%a0%e8%bf%91%e6%b3%95/（2020.12.1確認） [↑](#footnote-ref-4)
5. 謝惠貞 「互相註解、補完的異語世界 ──論東山彰良『流』中的文化翻譯」、『台灣文學學報』第29期、2016.12、 138-144頁。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 東山彰良「新時代」『越境』集英社、2010.7。 [↑](#footnote-ref-6)